



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	実践報告「プレ・イマージョン地理：地理ってなんだろう？」( fulltext )
Author(s)	来栖,真梨枝
Citation	国際中等教育研究：東京学芸大学附属国際中等教育学校 研究紀要(8): 161-169
Issue Date	2015-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/140171">http://hdl.handle.net/2309/140171</a>
Publisher	東京学芸大学附属国際中等教育学校
Rights	

## 実践報告「プレ・イマージョン地理：地理ってなんだろう？」

### (Pre-Immersion Social Studies: The basics of Geography)

来栖真梨枝

#### 1. 課題の設定

本稿は、「グローバル人材育成」に関わり東京学芸大学附属国際中等教育学校で実施したイマージョン授業の実践報告である。教育のグローバル化が模索される中、本校は国際バカロレア (IB) 中等教育プログラム (MYP) 認定校でありディプロマプログラム (DP) 候補校である<sup>1</sup>。一方で各教科においてはイマージョン授業<sup>2</sup>を開講しており、「グローバル人材育成」を目指し様々な手段を講じている。本報告では、ある授業実践から本校のイマージョン授業のあり方について一石を投じたい。

そもそも日本におけるイマージョン授業はどのようなものなのか。[荒川洋平]は、「[...] 目標言語が学習者にとっての外国語である場合、イマージョン授業は外国語教育の一方法としての側面も有することになる。」と述べている。すなわち日本におけるイマージョン授業は、日常生活ではほとんど英語を使うことのない生徒達にとって英語の授業以外で英語を使う機会を提供するものである。しかし、本校におけるイマージョン授業ではこの側面が欠けている傾向にある。具体的には、以下のようなことである。本校では後期課程 (高等学校段階) において地理歴史・公民、数学、理科、芸術でイマージョン授業を開講しており、生徒が選択できるようになっているが<sup>3</sup>、筆者が 2013 年度・2014 年度に担当した「イマージョン世界史 A」「イマージョン政治経済」を選択した生徒のほとんど全員が帰国生徒<sup>4</sup>であった<sup>5</sup>。つまり本校における後期課程のイマージョン授業は外国語教育の側面よりも、既にある程度習得した第二言語強化の側面が強いと言える。

では、帰国生徒以外の生徒が後期課程においてイマージョン授業を選択しないのはなぜなのか。本校では、後期課程から始まるイマージョン授業に向けて「プレ・イマージョン授業」を行っているが<sup>6</sup>、それにも関わらず英語を外国語として学習する生徒のイマージョン選択数が極端に少ない。そのため本報告では「プレ・イマージョン授業」のあり方について検討したい。

「プレ・イマージョン授業」とは本校 1.2 年生対象に、通常日本語で行われる教科の時間内に行われる。そのため、帰国生徒とそうではない生徒が同じ教室にいることが特徴の一つである。この特徴を利用し、ある「役割」を帰国生徒に与えることによりすべての生徒の授業の理解度や参加度を深めることを目指す。その結果、より多くの英語を外国語とする帰国生徒ではない生徒が後期課程でもイマージョン授業を選択するようになることを目指したい。本実践は、以上の課題設定に基づいて設計した授業である。

## 2. 実践報告

日時：平成26年10月23日（木）2限・5限、27日（月）2限・3限

対象：東京学芸大学附属国際中等教育学校

1年1組（28名）2組（27名）3組（27名）4組（28名）

場所：同上校 各ホームルーム教室

### （1）本授業の背景

東京学芸大学附属国際中等教育学校では、後期課程において地理歴史・公民、数学、理科、芸術の各教科でイメージング授業を開講している。また、前期課程ではそれに備えて3年次に通年で各教科の内容を英語で学ぶ授業を、そして1・2年次では英語で行う授業を各教科で一年に一回ずつ行い、学習の道具として英語を運用することの定着を目指している。1-3年次に行うものをプレ・イメージング授業と呼ぶ。本授業は1年次に社会科【地理的分野】で、単元の間に行われるイメージング授業である。対象生徒にとっては本校における初めての社会科イメージング授業であるため、今後のイメージング授業に対して前向きな態度を育む配慮と工夫をする必要がある。

### （2）生徒の実態

本校は海外帰国生徒を受け入れている中等教育学校であり、各クラスに英語圏での学習経験が十分にある生徒が複数人いる。その一方でクラスの約三分の二の生徒は日本における一般的な中学生同様、英語学習を開始して7か月が経とうとしているという初心者である。本校における英語の授業は生徒の学習経験によってクラスが分かれており、前者は「アドバンストクラス」、後者は「コアクラス」に振り分けられる。

しかし、本授業は社会科の時間内に実施されるため「アドバンストクラス」「コアクラス」の生徒が教室に混在し、英語学習に関する習熟度の差が非常に大きいことが特徴である。「アドバンストクラス」の生徒の多くは日本地理の知識量は少ないものの、社会科の学習に関してとても前向きで積極的に発言を行う生徒が多い傾向にある。また、教員や周りの生徒に質問することに抵抗がなくコミュニケーションを取りながら学習を進められる生徒が多く見受けられる。普段の授業では、日本語に難しさを抱え授業に着いてこられなくなってしまう場面もあるが、その生徒達も学習内容自体に問題を抱えているというわけではない。また、「アドバンストクラス」の多くの生徒は英語に関係する何らかの役割を与えると（例えば英語のグラフの読み取りなど）、積極的にその役割を果たしてくれる傾向にある。

一方で、「コアクラス」の生徒の取り組みも良好である。しかし、突然行われるイメージング授業に拒否反応を示す生徒を想定しておく必要があるだろう。また、「コアクラス」の生徒は必ずしも本時のすべての学習内容を理解できるわけではないが、少しでも多くの学習内容を理解できたと感じさせるような仕掛けが必要である。

本授業では特に「アドバンストクラス」の生徒に適切な役割を与え、「コアクラス」の生徒のモチベーションを保ちつつ50分の授業を行いたい。「コアクラス」の生徒が学習内容を理解できたと思うこと、またイメージング授業を受けたいという態度を形成することが目標である。具体的にはクラス全体を学習班に分け授業を行い、その際に「アドバンストクラス」の生徒が

必ず班に一人ずつは居るようにする。授業中、「アドバンストクラス」の生徒を“Little teachers”と呼び、班のメンバーの理解に責任を持つという役割を与える。「コアクラス」の生徒は、班にサポートする生徒がいることにより学習内容の理解度が高まると予想される。

### (3) 本授業の教材について

本時は、学習指導要領の定める以下に挙げる要素の一部である。

#### ア 日本の地域構成

地球儀や地図を活用し、我が国の国土の位置、世界各地との時差、領域の特色と変化、地域区分などを取り上げ、日本の地域構成を大観させる。[文部科学省]

本授業では特に「我が国の国土の位置」に焦点を当て授業を進める。多くの生徒にとって英語で学習すること自体馴染みのないことであるため、学習内容に関しては馴染みの深いことを扱い、イメージン授業に対する抵抗感を弱めることが狙いである。

また、[古家，小松]はプレ・イメージン授業の実践報告において『[…] 授業直後に「またイメージンを受けてみたいと思う人…」と問うたところ 27 名中 5 名の生徒の手しか挙がらなかった事実は真摯に受け止めなければならない。』と述べている。どちらの英語のクラスの生徒が手を挙げたかは明らかにされていないが、本授業ではより多くの生徒がまたイメージン授業を受けたいと思う更なる手立てが必要であることは明確である。

「コアクラス」の生徒であってもまたイメージン授業を受けたいと思えるよう、生徒がよりイメージしやすいテーマを選択した。生徒はこの内容について、一学期に日本語で学習済みである。そのため、生徒は未習の英単語が出てきたとしても既習の日本語の知識と結び付けることができることが想定される。

### (4) 焦点を当てる 10 の学習者像

本授業では、IB が掲げる 10 の学習者像<sup>7</sup>が大きな役割を果たす。それぞれターゲットとする生徒層があるが、生徒には示さない。

#### ・挑戦する人

「コアクラス」の生徒に対しては、「挑戦する人」を提示し間違いを恐れず発言するよう促す。

#### ・コミュニケーションをとる人

グループワークの際に積極的に参加するよう促す。

#### ・思いやりのある人

「アドバンストクラス」の生徒は自分が学習内容を理解するだけでなく、周りの生徒の理解を助けるように促す。

(5) 本時の授業計画

段階	学習内容	生徒の学習活動
<p>導入</p> <p>10分</p>	<p>1. Briefly explain what immersion class is.</p> <p>◇ The Learner Profile</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Risk-taker</li> <li>・ Communicator</li> <li>・ Caring</li> </ul> <p>◇ Arranging desks</p> <p>◇ Topic today:</p> <p>“The Basics of Geography”</p> <p>→What do the words Geography and Geographers mean?</p> <p>→Refer to a word “Geographia”.</p>	<p>10の学習者像のポスターを見て意味を確認する。</p> <p>「アドバンス」の生徒達は自分の班の“Little Teachers”であり、班員が学習内容を理解できるようにサポートすることを強調する。</p> <p>板書を見て、用語の意味を理解する。</p> <p>「アドバンス」の生徒は班員を助けながら理解を進める。</p> <p>今日のテーマは、「地理とはどのような勉強なのか」ということを理解する。</p> <p>また、今日の目標はプリントにあるキーワードを理解することだということを確認にする。</p>
<p>展開1</p> <p>10分</p>	<p>2. Method of Geography</p> <p>◇ Maps</p> <p>◇ Photographs</p> <p>◇ Tables and Graphs</p> <p>Explain why these methods are important for Geographers to study Geography using atlas, photographs, tables and graphs.</p>	<p>身の回りにある地図帳や教科書を開き、どのような道具を使って地理を勉強してきたかを振り返る。</p> <p>一人の生徒が全体に向けてプリントの一部を音読する。「地図」の特徴を理解する。</p>
<p>展開2</p> <p>15分</p>	<p>Themes of Geographers</p> <p>3. Location</p> <p>◇ Discussion: “Where is Japan?”</p> <p>◇ Sharing answers</p>	<p>グループで “Where is Japan?” に英語でどのように答えられるかを話し合う。「アドバンス」の生徒が率先し、答えになるような英語を準備する。発表は英語で行うが、グループの作業には英語と日本が混ざっていてもよい。</p>

	<p>◇ Absolute Location</p> <p>◇ Latitude and Longitude</p> <p>◇ The location of Tokyo Discussion: "How do you express the location of Tokyo using latitude and longitude?"</p> <p>◇ Sharing an answer</p> <p>◇ Relative location Relative location is how a place is related to the surroundings.</p>	<p>説明とスライドを見て“Hemisphere”の意味を理解する。説明を聞き、“Latitude and Longitude”を理解する。既習の内容を結びつけながら理解することが望ましい。</p> <p>グループで話し合いながら、例や地図帳を参照し東京の緯度経度を英語で表しプリントに書き込む。</p> <p>・ 35° North latitude, 139° East longitude</p> <p>例を見て、相対的位置関係の考え方を理解する。</p>
<p>展 開 3  10 分</p>	<p>4. Place</p> <p>◇ Describing a photograph Discussion: "What can you see in the photograph?"</p> <p>◇ Sharing answers</p>	<p>地理を勉強するということは、ある場所がどのようなになっているか("What is it like?")を明らかにすることでもあり、それには二つの観点があることを説明から理解する。</p> <p>グループで話し合いながら、スライドの写真の中にあるものを挙げる。二つの観点を踏まえながらグループで話し合いながらプリントにメモをする。</p> <p>クラス全体に発表する。</p>
<p>ま と め  5 分</p>	<p>5. Checking key words Reconfirm the keywords.</p> <p>6. Answering survey</p>	<p>今日学んだことを最後の空欄に入れる。</p> <p>アンケート調査</p>

(6) 本時の参考資料

本稿の参考資料一覧にまとめて示す。

(7) 評価

本時の学習内容は総括的評価に含まない。

### 3. 本実践の振り返り

この実践では、特に「コアクラス」の生徒が本時の学習内容を理解したと感じ、前向きな印象を持ち今後もイメージン授業を受けたいという姿勢を持たせることを目標とした。授業後、生徒に対して行った振り返りシートからはある一定の成果と課題が見出せた。振り返りシートには、どの程度本授業を理解できたか（すべて理解できた、まあまあ理解できた、どちらとも言えない、どちらかという理解できなかった、全然理解できなかった）という質問と、自由記述を行った。振り返りシートの結果は「コアクラス」「アドバンストクラス」に分け集計を行い、本稿では著者が特にターゲットとする「コアクラス」の結果を表1で示した。

振り返りシートを集計した結果、「理解できた」（「まあまあ理解できた」を含む）と答えた生徒は「コアクラス」全体（72名）の36%にとどまった。一方で「どちらとも言えない」「理解できなかった」（「どちらかという理解できなかった」）と答えた生徒は全体の64%であり、6割以上の生徒が「理解できた」以外の解答に丸をつけた。

次に「理解できた」以外の解答に丸をつけた生徒が、イメージン授業に対してどのような印象を持ったかを分析し以下の二つに分類した。

- ① 主に「アドバンストクラス」の生徒との関わりについて述べている
- ② 主に自分の英語力とイメージン授業の関係について述べている
- ③ その他

①のような記述は例えば以下のような回答である。

「難しかったけど、友達が教えてくれたので良かったです。」

「よくわからない所がたくさんあったけれど、アドバンスの人にたくさん教えてもらいました。それはそれで楽しかったのでよかったです。」

「私はコアなので、今日の授業はよくわかりませんでした。でも普段普通に過ごしているアドバンスの人がペラペラ喋っていて影響を受けました。これからは今まで以上に授業にはげみ、指されたら答えられるようにしたいです！」

「今日はアドバンスの人に教えてもらいながら、プリントをうめるだけで精一杯だったので、耳が慣れるように少しずつ理解したいです。」

「難しいキーワードが出てくると辞書がないと困る感じでした。でも、イメージンでの授業は楽しかったです。アドバンスの人と英語で話すことが、できました！！」

「理解できた」と回答した「コアクラス」の生徒の中にも、このように「アドバンストクラス」との関わりについて述べている生徒が大勢いた。この授業は「アドバンストクラス」の生徒に“Little teachers”の役割を与えることによって、「コアクラス」の生徒にとってまったく理解不能なものではなく、モチベーションを高めるものになったことがうかがえる。

また、②の記述は以下のような回答である。

「私は英語を学習してからあまり時間がたっていません。英語の授業でも難しいのに社会のことを英語でやるのはハードルが高かったです。でも少しずつ理解していきたいのでまたこのような授業をやってください！！」

「自分が思っている以上に理解できた。理解できなかったこともあった。」

「意味を理解するのにすごく時間がかかってしまった」

「難しかったです。また受けてみたいです。」

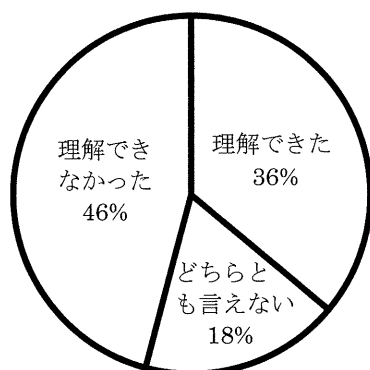
「理解できなかった」と答えた生徒の中でも、またイマージョン授業を受けたいという趣旨の記述をした生徒が複数名いた。今後イマージョン授業を受けることによって、自分の英語の力が向上するという印象を持ったということがうかがえる。

その他、「英語は難しい。」「今度からは日本語でやってほしい。」などのコメントも少数だが寄せられた。

表 1

今日のイマージョン授業はどの程度理解できましたか？

「コアクラス」72名



#### 4. 結論

本実践では、本校の後期課程におけるイマージョン授業選択者のほとんどが帰国生徒であることに課題を設定した。そして、より多くの帰国生ではない・英語が外国語である生徒にも後期課程でイマージョン授業を選択することを考慮してもらうために、どのような「プレ・イマージョン授業」を行えばよいかを探究した。本実践では、社会科のイマージョン授業を行う際「アドバンストクラス」の生徒に、班の中での“Little teachers”という役割を与え「コアクラス」の生徒の手助けをするよう促した。また、学習内容の一部に既習範囲を含むことにより「コアクラス」の生徒でも理解できたという印象を持てるよう工夫した。その結果、「コアクラス」の4割弱の生徒がこの授業を「理解できた」と答えた。「どちらとも言えない」「理解できなかった」と答えた生徒が半数を大きく上回ったが、その中でも「アドバンストクラス」のサポートや英語力に影響を受けたり、自分の英語力の向上に結び付きそうな印象を持った生徒がおり、イマージョン授業に対する前向きな態度の形成にはつながったと考えられる。本実践の対象は一年生であったが、二年後にこの生徒達が後期課程になりイマージョン授業の選択をするまで、本実践で得られた成果に基づき「プレ・イマージョン授業」を行っていきたい。



## 参考文献

- Daniel D. Arreola, Marci Smith Deal, James F. Petersen, Rickie Sanders. *World Geography. The USA*: McDougal Littell, 2007.
- International Baccalaureate Organization. “Middle Years Programme Individuals and societies guide (For use from September 2014 / January 2015).” 2014年9月27日. *International Baccalaureate Web Site*. <www.ibo.org>.
- 雨宮真一, ほか. “外国語科 MYP の取り組み その3.” *国際中等教育研究: 東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要* [2013]: 89-103.
- 古家正暢, 小松万姫. “イマージョンで行う社会科「基礎地理」プレ・イマージョン『アフリカとのつながりを感じよう!』.” *国際中等教育研究: 東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要* [2009]: 45-52.
- 荒川洋平. “日本における英語イマージョン教育の論考.” *東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 30* [2004]: 105-122. 文書.
- 東京学芸大学附属国際中等教育学校イマージョン委員会. “イマージョン授業について.” *国際中等教育研究: 東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要 2* [2009]: 44.
- 文部科学省. “新学習指導要領 社会科.” 2012.

---

<sup>1</sup> 2014年10月28日現在。

IBの「初等教育プログラム」(PYP)、「中等教育プログラム」(MYP)、「ディプロマプログラム」(DP)の3つのプログラム(および「IBキャリア関連サーティフィケート」)を実施することができるのは、国際バカロレア機構に認定された学校のみです。候補校であることは、IBワールドスクールとして認定されていることを保証するものではありません。

<sup>2</sup> [荒川洋平]はイマージョン教育を以下のように定義している。

『目標言語という「教科を」学ぶのではなく、ある教科内容を目標言語という「方法で」学ぶ、という教育の形態が「イマージョン教育」と定義される。たとえば教育段階を問わず、理科や音楽といった教科を、英語という目標言語で教えれば、それはイマージョン教育となる。』

<sup>3</sup> 選択の方法としては2パターンあり、例えば4・5年の「イマージョン世界史A」は日本語で行う「世界史A」と同時開講になっており、生徒はどちらかを選択する。一方で6年の「イマージョン政治経済」は日本語で行う「政治経済」とは別の枠で開講されているため、生徒はそのどちらも選択することが可能である。より詳しいカリキュラムは本校ウェブサイトをご覧ください。(http://www.iss.oizumi.u-gakugei.ac.jp/)

<sup>4</sup> 本校は帰国生徒の受け入れを行っており、後期課程においてはクラスの約三分の一が帰国生徒である。

<sup>5</sup> 選択者数(うち帰国生徒ではない生徒)

2013年「イマージョン世界史A」33(2) 「イマージョン政治経済」4(0)

2014年「イマージョン世界史A」40(0) 「イマージョン政治経済」1(0)

<sup>6</sup> 詳しくは [東京学芸大学附属国際中等教育学校イマージョン委員会]参照。

<sup>7</sup> 詳しくは [International Baccalaureate Organization]参照。

## 研究要旨

日本におけるイマージョン教育とは、教科教育と外国語教育の両方の側面を持ち合わせる。しかし、本校の後期課程におけるイマージョン授業選択者のほとんどは外国である程度英語を習得している帰国生徒（以下、「アドバンストクラス」の生徒）であるため、本校のイマージョン授業はほとんど外国語教育の側面を持ち合わせないのが現状である。そのため、本稿ではより多くの帰国生ではない生徒（以下、「コアクラス」の生徒）にも後期課程におけるイマージョン授業を選択したくなる手立てとして、どのような工夫ができるかを課題とし、特に一年社会科【地理的分野】の「プレ・イマージョン授業」の授業実践に焦点を当てた。教室内に「アドバンストクラス」「コアクラス」の生徒が混在するという特質を利用し、前者の生徒たちにグループの先生（本稿の中では“Little teachers”）という役割を与えた。授業後のアンケートからは「コアクラス」の生徒が「アドバンストクラス」の生徒に大きな影響を受け、多くの生徒がイマージョン授業を今後も受けたいという回答を残している。これは、今後の本校のイマージョン授業のあり方について示唆するものだと考える。

## Abstract

Immersion education in Japan has two aspects: coursework and foreign language education. At TGUISS, however, most of the students taking the immersion class in Years 4 to 6 are returnees who have learned much English abroad (“Advanced Class Students”), which means that our immersion class has no significant aspect of foreign language education. To address the situation, this article examines how to encourage more non-returnee students (“Core Class Students”) to take the immersion class in Years 4 to 6, with special focus on “pre-immersion class” in social studies (geography) for Year 1. As both Advanced and Core Class Students study in the same classroom, we assigned the former category of students to serve as teachers in their group (referred to as “Little Teachers” in this article). In response to an after-class questionnaire survey, many of the Core Class Students said that they were inspired by the Advanced Class Students to take the immersion class. The results provide suggestions as to how we should organize the immersion class.